

## 『The Miseducation of Cameron Post』

パート 1

一九八九年 夏

### 第1章

パパとママが死んだ日の午後、わたしはアイリーン・クラウソンと万引きをしていた。

前の日、パパたちは毎年夏になると恒例のキャンプをしに、クエーク・レイクに出発した。ポストおばあちゃんがわたしの面倒を見るためビリングスから来てくれたから、アイリーンをうちに泊める許可をもらうのは簡単だった。「こう暑くちゃあ、いたずらする気にもならないよね、キャメロン」いいよといったすぐあとに、おばあちゃんはそうつけ加えた。「まあでも、女三人で楽しくやりましょ」

マイルズシティはここ数日、華氏九十度台のうだるような暑さが続いていたけれど、まだ六月の終わりでしかないことを思えば、モンタナ州東部にしても暑いといえた。あんまり暑くてそよ風ですら、まるでだれかがドライヤーを町に向かって吹きつけているみたいだった。ほこりが舞い、大きなハコヤナギの木から飛ばされた綿の実が、真っ青な大空を漂い、家々の庭先にふさふさのダマを作る。アイリーンとわたしはそのダマを「夏の雪」と呼んでいて、ぎらつく日射しに目をすがめながら、ときどき舌で受けとめようとした。

わたしの寝室は、ウィボー通りに建つうちの屋根裏にあり、天井のたるきがせりあがってやけに傾き、夏はむし風呂状態だった。窓にはうす汚れた扇風機がはめこまれていたけれど、熱風とほこりを吹きつけるばかりで、それでもほんのときたま、朝早く刈りたての芝のおいを運んでくる。

アイリーンの両親はブロードスの近くで大きな牧場を営んでいた。そんないなかでさえ——MT（モンタナ州道）五十九号線を曲がるとあとはわだちのついた一本道で、灰色のヤマヨモギの茂みと、ピンク色した砂岩の丘を太陽が容赦なく照りつける——家にはセントラルエアコンがあった。クラウソンさんはいかにも牧場の男然とした、体の大きな人だ。アイリーンんちに泊まったとき、朝起きて鼻の先を触ってみると、ひんやりした。おまけに冷蔵庫のドアには製氷機がついていて、氷を浮かべたオレンジジュースとジンジャーエールをひっきりなしにかき混ぜ、「カクテルタイム」なんて呼んでいた。

うちにはエアコンがないから、対策をこうじる。洗面台の蛇口からひえひえの水を流し、Tシャツをひたした。それからしぼる。つぎにもう一度ひたしてから、アイリーンとわたしがプルブル震えながらかぶる。そうするとまるで、氷のように冷たくて、じっとりぬれ

た皮膚を一枚まとったみたいになり、そのままベッドに横たわる。夜のあいだにシャツが固まり、暑気とほこりを吸って、ちょうど、おばあちゃんがパパのワイシャツを洗うとき、軽くのりを塗ったえりみたいにパリパリに渴いていた。

朝の七時には、すでに気温は八十度を数えた。ふたりともひたいに前髪をはりつかせ、赤らんだほおには枕のあとがついて、目尻には目やにがこびりついていて。朝食に残りもののピーナッツバター・パイを出してくれたあと、ポストおばあちゃんはトランプのひとり遊びをしながら、ときどき分厚い眼鏡ごしに、大音量でつけた『ペリー・メイソン』の再放送に目をやっている。おばあちゃんは探偵ものドラマのファンだ。十一時ちょっと前になると、えび茶色のシボレー・ベル・エアーでふたりをスカンラン湖まで送ってくれた。いつもは自転車に乗って水泳の練習に行くけれど、アイリーンは町なかに自分の自転車を持っていない。窓を下げて、ベル・エアーは車内特有のこもった熱気でむっとする。ママの運転かアイリーンのママが運転するときは助手席のとりあいになるのに、ベル・エアーのときはふたりとも後部座席に座り、グレイ・ブポン（粒マスタードのブランド）のコーナーゴッコをして、おばあちゃんをお抱え運転手に見たてた。パーマをかけたばかりのおばあちゃんのまっ黒な髪が、背もたれごしにのぞく。

車は（一時停止の標識と赤信号ふたつを含めて）だいたい、一分半ほどメイン・ストリートを走る。〈キップス・ミニット・マーケット〉の前を通った。ウィルコキシンのアイスクリームを、コーンからこぼれ落ちそうなほどのつけてくれる店だ。はす向かいに建つ二件の葬儀屋を通り過ぎ、線路の下をくぐる。親が給料を引き落としているあいだ、ダムダムポップス（棒つきキャンディ）をくれる銀行や、図書館や映画館、飲み屋街に、公園を通り過ぎ——小さな町のどこにでもあるような通り、きっとそうなんだろう。けれどこの通りは自分たちの地元で、なれ親しんだ感覚が当時は好ましかった。

「終わったら、すぐに帰ってらっしゃい」コンクリート製のがっしりした監視員控え室と、「バスハウス」と呼ばれている脱衣所の前に車をとめ、おばあちゃんがいった。「ダウンタウンをほっつき歩いたりするんじゃないよ。スイカを切っておくから、リッツ・クラッカーとチェダーチーズのお昼を食べましょ」

パッ、パーとわたしたちに警笛を鳴らすと、えんえんと編んでいるかぎ針編み用の糸を買いたしに、おばあちゃんはベン・フランクリンの店に行った。前によく、警笛を鳴らしては「元気のもと」だからといていたのを思い出す。あんなにごきげんなおばあちゃんを見るのは久しぶりだ。

「キャメロンのおばあさんって、頭おかしいんじゃないの」アイリーンが「おかしい」の語尾を引きのぼして発音し、焦げ茶色の目をぐりんと回してみせた。

「おかしいってなんでさ？」ときいたけど、返事をするひまを与えない。「朝にパイを出されたときはちっとも構わなさそうだったじゃない。ふたきれ食べてた」

「そんなの、いかれてないってことにはならないから」わたしが肩にかけたビーチタオルのはしをアイリーンがぐいっと引っばる。タオルはわたしの素あしをはらい、コンクリートに落ちた。

「ふたきれも」繰り返して、タオルをつかむ。アイリーンが笑った。「食いしん坊サリー」

アイリーンはクスクス笑い続け、踊りながらわたしにつかまらない距離まで離れた。「おばあさんは完べきに頭おかしい、正真正銘いっちゃってる——精神病院行き決定」

これが、アイリーンとわたしのいつものパターン。親友か目の敵のどっちかで、真ん中にはなし。一年生から六年生まで一番をはりあった。体力テストでは、けんすいと走り幅跳びでアイリーンが勝ち、うで立て伏せと腹筋と五十ヤード走ではわたしが勝った。スピング競争はアイリーンの勝ち。科学博覧会はわたし。

アイリーンがわたしに、昔のミルウォーキー鉄橋から飛び降りてみろとけしかけたことがある。わたしは飛び降りて、川底に沈んでいた車のエンジンに頭をぶつけてかち割った。泥で濁った水のせいで、沈んでるのがわからなかった。十四針縫い——大けがだ。わたしがアイリーンにけしかけたのは、町に残った最後の木柱標識、ストレヴェル通りに立つ「ゆずれ」の交通標識を、のこぎりで切り倒すこと。アイリーンは挑戦を受けて立った。切ったあと牧場まで持って帰るのに困り、わたしに預けてよこしたけど。

「おばあちゃんは年寄りなだけだもん」わたしは手首を回し、足もとのタオルを投げ縄にした。しっかり巻きついたらムチ打ってやろうと思ったのに、アイリーンに感づかれた。

後ろに飛びのいてよけたとたん、水泳の練習を終えたばかりでゴーグルをつけたままの男の子にぶつかる。アイリーンのサンダルが片方脱げかけた。前にすべって、つま先二本で引っかける。「ごめんね」水をしたたらせた子どもとその母親を見もせず、アイリーンはサンダルを前にけてわたしから遠ざかった。

「あんたたち、小さい子もいるんだから気をつけなさいよ」母親は、わたしに注意した。手近にいてタオルを巻いていたのと、アイリーンと一緒にいるとき、話しかけられるのはいつもわたしだからだ。ゴーグルをした男の子の手を、まるでひどいケガをしたかのようにギュッとつかむ。「駐車場は遊び場じゃないのよ、そもそも」息子の手を引き、サンダル履きの小さな歩幅でその子がついて行くのに苦勞するほどスタスタ歩いていく。

わたしがタオルを肩にかけると、アイリーンが戻って来て、水泳教室通いのわが子をミニヴァンに乗せる母親を見守った。「いじわるばばあ」アイリーンが毒づく。「走って行って、車をバックで出すときひかれたふりしなよ」

「それって、挑戦？」アイリーンは、めずらしく何も返さない。いいだしっぺのくせに、アイリーンに言葉を投げかけたとたん、わたしまで気まづくなり、つぎになにをいえばいいのかとまどった。きのう、パパとママがクエーク・レイクに出発したすぐあとに起きたことを、ふたりとも覚えていた。朝じゅうずっとソワソワしていたけれど、どちらもひとことも口に出さずにいた。

アイリーンがわたしに、キスをけしかけた。ふたりが牧場の干し草置き場にいたときだった。クラウソンさんを手伝って柵の修理をしたため汗だくになり、ルートビア（炭酸飲料）のびんを分けあって飲む。一日じゅう、競争ばかりしていた。アイリーンがわたしより遠くへつばを飛ばせば、わたしはロフトから下の干し草に飛びおり、それからアイリーンが積みあげた木箱のうえから宙返りしてみせ、つぎにわたしが四十五秒間逆立ちをした。そのひょうしに顔と肩までTシャツが落ちてきて、お腹がまる見えになった。ローラースケート場のネックレス——半分に割れたハートに自分のイニシャルが入ったやつで、アイリーンとのおそろい——が顔の前にぶさがり、安っぽい金属でチクチクする。ネックレスは首のまわりのこすれたところに緑色のあとをつけたけど、日焼けでほとんど目立たない。

もっと長く逆立ちしていられたのに、アイリーンにおへそをつつかれた、けっこう強く。「やめてよ」というが早いかな、相手の上にくずれ落ちる。

アイリーンが笑った。「水着で隠れたところぜんぶ、なまっ白いや」顔が接近し、ぼっかりあいた口が、さも干し草を突っこんで欲しそうだったので、かなえてやった。

アイリーンは三十秒ばかりせききこんだり、吐きだしたりしていた。いつだって芝居がかってみせるのだ。紫とピンクのバンドを新しくはめこんだブレースから、アイリーンがわらを二本ばかりつまみだす。それから背筋を伸ばして座りなおし、真顔でいう。「水着の線をもう一回見せてよ」

「なんでさ？」そういいながら、すでにシャツを引っぱって、首と肩のあいだに走る白い線を見せていた。

「ブラのひもみたい」アイリーンが線にそって、ゆっくり指を走らせる。うでとあしにとりはだが立った。アイリーンがわたしを見て笑う。「ことし、ブラつける？」

「たぶんね」たったいま、ほとんど必要ないところをアイリーンに見られたくせに、そういった。「そっちは？」

「するよ」線を繰り返しなぞる。「中学にあがるし」

「べつに、校門で検査されるわけじゃないでしょ」指の感触が気持ちよかったが、その意味するところがこわかった。干し草をつかみ、アイリーンが着ている「いのちのなわとび（オーストラリアのチャリティ団体）」のロゴがついた、紫色のTシャツの胸もとに押し

こむ。悲鳴をあげてやり返そうとするアイリーンととっくみあい、二分もすると、ロフトにたまるよどんだ熱気で、ふたりとも汗まみれになった。

木箱によりかかり、ぬるくなったルートビアをふたりでかわるがわる飲む。「でも、おとなにならなきゃ」アイリーンがいった。「つまりおとなっぽくふるまうってこと。中学校に行くんだから」それからビアをグビッとあおる。真剣な口ぶりが、「アフタースクール・スペシャル（教育目的のテレビ映画）」を連想させた。

「なんでしつこくいうの？」

「だってもうすぐ十三歳だし、それってティーンエイジャーってことだよ」アイリーンの声が尻すぼみになり、片足を干し草に突っこむ。それから、びんに向かってぼそぼそつぶやいた。「ティーンエイジャーになるのに、キスはキスのしかたも知らないじゃない」ビアをすすりながらクスクス笑ってみせようとして、口から少し液がたれた。

「そっちも同じでしょ、アイリーン。自分が“セクシー・レクシー、だとも思ってるの？」けなすつもりでそういった。ボードゲームの『クルー』で遊ぶときは、ちなみにしょっちゅうやっていたけど、アイリーンもわたしもミス・スカーレットのコマには触りさえしなかった。うちにあった『クルー』の箱は、おかしな古くさい服装の人物が写実的に描かれ、ゲームの登場人物に扮して骨董品を並べた部屋でそれぞれポーズをとっていた。巨乳のミス・スカーレットは、赤いドレスを着たヒョウみたいに色あせたカウチに寝そべり、黒い長ギセルからたばこを吸っている。わたしたちは写真の女性に“セクシー・レクシー、とあだ名をつけて、太鼓腹のミスター・グリーン、オタクのマスタード大佐と三角関係にあるという設定を創作した。

「レクシーにならなきゃキスできないわけじゃないもん、ばーか」

「キスする相手なんかいるわけ？ ていうかさ」答えを承知で質問し、息をつめて返事を待つ。何もいい返してこない。アイリーンは代わりにルートビアをひと口で飲みほすと、びんをわきに置き、それからそっと足で押して前に転がした。干し草の山を通り過ぎ、床を転がっていくガラスびんをそろって見守り、やわらかなバーンウッドの床に響く規則正しい、うつろな音にききいる。ロフトはやや斜めに傾いていた。はしに届いたびんが視界から消え、真下の干し草に落ちる音がかすかにした。

わたしはアイリーンを見た。「おじさんに見つかったら、怒られるよ」

アイリーンがじっと見つめ返す。ふたたび顔が接近する。「わたしにキスできるか、やってみな」一秒も目をそらさない。

「それ、ほんきで挑戦してる？」

「もち」と顔に書いて、アイリーンがうなずく。

それで、わたしはすぐにやった。それ以上なにかいったり、アイリーンのママが手を洗って夕食にしましようと呼びにくるより前に。キスは、やってみないとなにもわからない。作用と反作用がすべてだ。アイリーンの唇はしょっぱくて、ルートビアの味がした。キスのあいだじゅう、目まいに似た感覚を覚えた。あのキス一度だけならただの挑戦で終わり、それまでとなんの違いもなかったはずだ。けれど、キスのあとふたりで木箱にもたれていたら、スズメバチが一匹舞いおりてきてこぼれた炭酸飲料のうえに弧を描き、そのときアイリーンがもう一度キスをした。わたしは挑戦してなんかいけないのに、でもうれしかった。

それから夕食に呼ぶおばさんの声が出て、わたしたちはたがいに照れながら、裏口の大きな洗面台で手を洗い、ホットドックを好みの方法（焼いてからケチャップを死ぬほどかける）で食べ、ストロベリー・プレッツェルのサラダを二杯たいらげたあと、おじさんが町まで送ってくれた。トラックのベンチシートに三人並んで座り、話はしなかったけれどAMラジオのKATL局がかかっている、マイルズシティの町外れに伸びるセメタリー・ロードを走るあいだじゅう、雑音を立てていた。

うちに着くと、ポストおばあちゃんと『マトロック』を少し観て、それからふたりで裏庭の、スプリングラーでまだ湿っている芝生に出た。キササゲの木が、白い釣り鐘型の花をたわわに咲かせ、むせかえるような甘いにおいで暑い空気を満たしている。ビッグスカイ（モンタナ州の愛称）の名にしおう、劇的な夕焼けをふたりで眺めた。濃いピンクや鮮やかな紫が、インクを流したようなブルー・ブラックの宵闇にとって代わられる。

一番星がまたたき、ダウンタウンにある映画館の電飾を思わせた。アイリーンがきいた。

「もしバレたら、わたしたち困ったことになるかな？」

「うん」即答する。女の子にキスしてはいけないと、はっきりだれかに禁じられたことはなかったけれど、それはいう必要がないからだ。キスをするのは男と女——わたしたちの年頃でも、テレビでも、映画でも、世界じゅうのどこでも。そういうきまりだ。男と女。それ以外は規格外れ。同じ年頃の女の子同士が手をつないだり、うでを組んで歩いている姿なら見かけるし、たぶんだがいをキスの練習台にしている子だってなかにはいると思うが、わたしたちが納屋でしたのは、そういうのとは違う。もっと真剣な、おとなびた行為、アイリーンがいったみたいだ。練習のためだけにキスしたんじゃない。本当は違った。少なくともわたしはそう思った。でもアイリーンには、なにもいっていない。アイリーンにもわかっていた。

「わたしたち、どっちも秘密を守るのは得意でしょ」考えたすえ、そういった。「だれかに教える必要があるわけじゃないし」アイリーンは返事をせず、暗闇のなかでどんな表情をしているのかわからない。暑く、甘いにおいが満ちるなか、すべてが宙づりになり、アイリーンの返事を待ちうける。

「うん。でも——」いいかけたとき裏口の明かりが点滅し、ポストおばあちゃんのずんぐりしたシルエットが網戸に映った。

「もうなかにお入り。アイスを食べて寝ましょう」

シルエットがドアを離れ、キッチンへ行くのを見守る。

「でも、なに？ アイリーン」声をひそめてきく。たとえ裏庭に立っていたとしても、おばあちゃんにはきこやしないとわかっていただけ。

アイリーンが息を吸う。かすかに音を立てて。「でも、もう一回できると思う？ キャム」

「気をつければね」あたりはすごく暗かったけど、わたしがほおを赤らめたのがアイリーンには見えたと思う。どっちでも同じだ。アイリーンはわかっている。いつだってわかっている。

...

スカンラン湖は一種の人工湖で、マイルズシティの市営プールとしては、一番進んだ施設だった。五十ヤード離れて木製のドック（足場）が二台しつらえられ、その距離は水泳連盟のルールに則っている。湖の半分を茶色い砂利のビーチが囲み、同じざらつく砂利を湖底の、少なくとも人が水に出入りするあたりに敷きつめてあるため、泥に足をすくわれないですんだ。毎年五月になると、市は湖にチューブのコースロープを張り、空っぽの湖にイエローストーン川から引いた水——および、金属の格子を通り抜けてくるもの一切合切を注ぎ入れる。なまずの稚魚、カレイ、ミノウ、ヘビ、それからアヒルの糞をエサにする、ちっちゃくて玉虫色のカタツムリ。このカタツムリは「スイマーのかゆみ」と呼ばれている発疹のもとで、わたしの両あしもそいつにやられ、ひざうらの柔らかいところが特に痛かった。

アイリーンはビーチに座って練習を見学した。駐車場での一件のあと、コーチのテッドがやってきたため悪さをしかけるひまがなくなり、ふたりともたぶん少しほっとした。ウォームアップのあいだ、わたしはドックにしがみついてアイリーンを目で追った。あの子は泳がない。かなづちだった。二、三回水をかいて進むことすらできないため、ディープウォーター・テストに合格して、右側のドックの先にある飛びこみ台から飛びこめる資格をとろうなんて、夢にも思わない。わたしが水泳を習うかたわら、アイリーンは柵を作り、牛を追い、焼き印を押し、牧場や家のご近所の手伝いをして夏じゅう過ごした。でもふたりのあいだではすべてが競争で、勝敗のはっきりつかないことが続いた。それで、わたしは泳ぎが得意なのを幸い、スカンランにアイリーンが来たときはいつも、これみよがしに

バタフライで往復したり、飛びこみ台からヘッドファーストダイブをしたり、自分の方が上だと何度も飽きずに証明してみせた。

だけど今日の練習は、ただひけらかしたいだけじゃなかった。ビーチに目をさまよわせ、アイリーンを見つけると、なんだか安心した。白い野球帽のつばで顔が陰になったアイリーンは、両手をせわしなく動かして、ざらついた砂でなにかを作っている。わたしが足場にひっかかっているのに気づいたアイリーンが二度ばかり手を振り、わたしが振り返す。ふたりの秘密にドキドキした。

手を振ったところを、テッドコーチに見られた。コーチは虫のいどころが悪く、行ったり来たりしたかと思えば低い方の飛びこみ台にあがり、そうかと思えば監視員用の椅子のまわりをまわって、レバーソーセージとタマネギのサンドイッチにかじりつき、笛を鳴らすと同時にすばやくスタートにつかない生徒のお尻を、黄色いキックボードでたたいた。夏休みでモンタナ大から帰省中のコーチは、真っ黒に日焼けした体にボディオイルを塗りたい、ヴァニラ・エストラクトとタマネギの匂いをさせた。スカンランの監視員たちはブヨよけに、ピュアヴァニラをふりかけている。

チームの女子の大半が、テッドに夢中だった。わたしはといえば、テッドみたいになりたいと思った。競技のあとで冷えたビールを飲み、はしごを使わずに監視台にのぼり、ロールバーなしのジープを乗りまわす、すきっ歯の、監視員の親分格に。

「友だちを連れてきて、練習はそっちのけか？」クロールで百ヤード泳いだら、テッドがストップウォッチで計ったわたしのタイムに眉をしかめた。「今の折り返しをお前がなんと呼ぶのか知らないが、フリップターンじゃないのだけは確かだ。ドルフィンキックは頭の上で足をしならせ、ストロークを三回するまで息つきするな。三回だぞ」

わたしは七歳のときから水泳教室に通っていたけれど、泳ぎのコツをつかんだのは去年の夏になってだった。とうとう息つきがちゃんとできるようになり——水中で息をぜんぶ吐きだし、頭を適切な角度で水面に出す——ストロークのたびに水をはたかなくなった。リズムをつかんだな、とテッドがいった。州の競技会ではいつも入賞し、コーチに目をかけられるようになると、少しこわくなった。期待されすぎだ。練習後、テッドコーチがドックから浜辺までついてきた。湖水で冷えきった体に回されたコーチのうでは、暑くるしくて重たく、むきだしの肩に脇毛が当たり、動物の毛皮みたいな感触で気色が悪かった。あとで、アイリーンと一緒に笑いのタネにした。

「あしたは友だち抜きだぞ、いいな？」アイリーンにきこえるようにコーチが大声でいう。

「一日二時間は水泳に集中しろ」

「わかりました」お説教されるところを、たとえたいしたことじゃなくてもアイリーンに見られて、気まずかった。

テッドが、テッドコーチ笑いをする。小さくて抜け目なさそうな、シリアルに描かれたカートゥーンのキツネみたいな笑い方だ。それから重たいうのでわたしをつかみ、前後にちょっと揺する。「わかったって、なにをだ？」

「あしたは水泳だけをやる」

「いい子だ」一瞬わたしをぎゅっと抱きしめてコーチのハグをしてから、テッドは脱衣場のほうへのしをし歩いていった。

そのときは簡単な約束に思えた。夏の日中、二時間は水泳に集中する——フリップターン、クロールのプル、バタフライのあご引き。楽勝だ。

...

昼食のあと、おばあちゃんは『ジェシカおばさんの事件簿』の再放送をつけたけれど、いつものように途中でこっくりしはじめた。アイリーンとわたしは前に観ていたから、リクライナーで寝ているおばあちゃんを起こさないように静かに部屋を出る。息を吸うとき、おばあちゃんはスクリーミング・ジェニーの爆竹みたいな音を、小さくピーッとたてた。

外に出ると、車庫の脇に立つハコヤナギの木に登り、それから車庫の屋根に飛び移った。パパとママにやっちゃだめだと念を押されていた行為だ。黒いタールを引いた屋根の表面は、ねばついて溶けやすくなっている。歩くとサンダルがめりこんだ。アイリーンが足をとられて前につんのめり、溶けた屋根に手をついてやけどした。

地面に戻ったあとは、サンダルの底をタールでべつつかせながら庭をまわり、蜂の巣を観察し、ポーチの階段から飛びおり、井戸水をホースで飲んだ。きのう納屋で起きたことを話す以外、なんでもやった。もう一度したいと思っているのはおたがいにわかっていた。アイリーンがなにかいうか、行動を起こすのを待っていた。アイリーンもまた、待っていると知っていた。

わたしたちはこのゲームが得意だ。何日だって続けられる。

「おばさんのクエーク・レイクのお話、またやってよ」アイリーンがローンチェアにドサッと腰をおろす。長い足をプラスチックのアームにだらんとかけて、タールがべっとりついたサンダルをつま先からぶらさげた。

アイリーンと向かいあってインディアン風にあぐらをかこうとしたら、日射しで死ぬほど熱くなったレンガ敷きの床で、むきだしのあしをやけどした。体勢を変えて、胸もとにひざを引きよせ、うでを抱きかかえる。アイリーンを見るには目をすがめて見あげるかっこうになり、その背中で太陽が白い塊となってキラついていた。「ママは、一九五九年の

地震で死ぬはずだったの」わたしはてのひらをレンガの上の、クロアリがなにかを運んでいる通り道に置いた。

「はじまりかた、そんなじゃない」足からぶさらげたサンダルがパティオに落ちる。もう片方も落とすと、驚いたアリが違うルートをとりはじめた。

「ならアイリーンが話しなよ」アリに指をはわせようとしたけれど、レンガの上でとまったきり固まっている。それからゆっくり指を迂回しはじめた。

「もう。へそを曲げないでよ。いつもどおりに話して」

「八月のある日、ママはウィントンのおじいちゃんとおばあちゃんとルースおぼさんと一緒に、キャンプに行きました」できるだけ一本調子に、五年生のとき大嫌いだったオーベン先生を真似て、ひとことずつ引きずるように話す。

「ふざけるんなら、もういい」アイリーンは床に沿ってつま先を動かし、サンダルを引かけようとした。

わたしは左右両方のサンダルを押しやって、アイリーンの手から遠ざけた。「わかったよ、だっ子だな。話す、話すよ。ママたちはイエローストーンの近くで一週間キャンプをして、そのあとロック・クリークに行くことにしたの。午後にはそこに着いてた」

「いつの午後？」

「八月。なんにちだったか覚えてるはずなのに、思いだせない。ウィントンおばあちゃんがお昼の用意をはじめて、ママとルースおぼさんはお手伝いをして、おじいちゃんは魚釣りに出かけたの」

「釣りの話をして」

「これから話すところ、邪魔されなきゃね。ママがいつもいってるけど、おじいちゃんがいったん釣り糸をたらしたら、家族はもう移動できないんだって。おじいちゃんは何でも動かないの。一回竿を振ったら、もう終わり」

「そのとこ、きくたびに鳥肌が立っちゃう」アイリーンが証拠にうでを差し出す。見ようと手を握ったとたん、電気がびりりと走るのをふたりとも感じた。話すのを避けていたことを思いだして、すぐさま手を離す。

「うん、でもおじいちゃんが小川に着く前に、ピリングスに住む知りあいがやって来たの。ママはそこんちのマーゴットとすごい仲よしでき。いまでも友だち。すてきな人だよ。それで、一緒にお昼を食べようってなって、そうしたらマーゴットのパパとママが、ヴァージニアシティまでドライブして、ひと晩キャンプしようっておじいちゃんとおばあちゃんを誘ったの。昔風の劇場でかかっているヴァラエティ・ショーを見よう、あの町に行ってきたところだっていって」

「それと、ビュッフェで食べるため」アイリーンがいった。

「スモーガスボード（バイキング料理）。そう、ママの話だと、おじいちゃんが行くことにしたのはスモーガスボードでパイとかスイスミートボールとかを食べれるってきいたからなんだって。ウイントンおじいちゃんは犬の甘党だからなあって、パパもいった」

「お昼を一緒に食べた家族で、だれか死んだ人がいなかったっけ？」アイリーンが少しだけ声をひそめてきいた。

「マーゴットのお兄ちゃん。あとはみんな無事」そのことを思うと、震えが走る。毎回そうだった。

「いつ起きたの？」アイリーンは両あしをアームの上でくるっと回して地面に足をつき、上体をわたしの方へ突きだした。

「その夜の、真夜中近く。ロック・クリークのキャンプ場にヘブゲン湖の水が流れこんで、そのあと水が引かなかったの。山頂が崩れ落ちて、せきとめられたから」

「そして、クエーク・レイク（地震湖）になった」アイリーンがわたしの代わりにオチをいう。

わたしはうなずいた。「みんな湖の底に埋まっちゃった。いまでもまだそこにいる。それから車とか、キャンパーとか、キャンプ場にあったものもぜんぶ」

「すごい不気味。絶対呪われてるね。なんでおじさんとおばさんが毎年そこに行くのか、わかんない」

「そういう習慣なの。いまでも大勢あのへんでキャンプしてるよ」どうして行くのか、わたしにもわからなかった。けれどパパとママは毎年夏になると行っていた。わたしが生まれてからこのかたずっと。

「ママはいくつだったの？」サンダルをつっかけて立ちあがったアイリーンが、うでをあげて伸びをしたひょうしに、おなかが少しだけのぞいた。

アイリーンと一緒にいるという感覚が、おもいがけないときに襲ってきて、そのたびにわたしは熱気球に乗っているように舞い上がり、顔をそむける。「十二歳。わたしたちと同じ年」

・・・

いつの間にか家をあとにし、ふたりぼっちで気ままにわいぎつな界限をぶらついた。六月も終わりだったため、花火の屋台がすでに出ていて、せっかちな子どもたちが裏庭でものをドカンと吹き飛ばしては、高い柵のうしろで煙が巻きあがる。ティペラリー通りの黄色い家の前で、だれかが歩道にまき散らした白い包み紙のスナップ・ポップ（地面で鳴らして遊ぶ爆竹）を、二個踏んづけた。薄いサンダルの底で小さな爆発が起き、悲鳴をあげ

るかあげないかのうちに、ひざ小僧のすりむけた、赤いクールエイド（笑顔のトレードマークが有名な粉末ジュース）そっくりにニタついた悪ガキたちが、木の砦から飛び出してきた。

「おっばいを見せなきゃ通さないぞう」片目にプラスチック製の海賊アイパッチをつけた太っちょの子が大声でどなり、仲間がはやしたてて笑う。アイリーンはわたしの手をとり、そのときは気まずい思いをこれっぽっちも覚えず、走り出した。みんなが叫び、夢中になって二ブロックばかり追いかけてくると、プラスチック製の銃がじゃまなのと、八歳の小さい歩幅のせいで悪ガキたちの速度が落ちた。外は暑かったけど、走るのは気持ちいい——手に手をとって、全速力で、上半身はだかのモンスターたちに追いかけてらる。

息を切らして汗をかき、〈キップス・ミニット・マーケット〉のひび割れた駐車場にやってきた。セメント製の車どめを飛び石にして遊んでいたら、アイリーンが「いちご味のバブリシャス（風船ガム）が欲しい」といいだした。

「買えるよ」車どめのブロックを飛びながら、わたしが応じる。「パパが出かける前に十ドルくれた。ママにはいうなって」

「ただのガム一本だよ。盗めないの？」

それまで十回は〈キップス〉で万引きしたことがあるけれど、いつも前もって計画していた。やると決めてからやり、ときにはアイリーンが品物のリストを書いて、挑戦ごっこにした——リコリスのひも型キャンデー、これは長いし色が派手で、セロハン紙でしっぽをつかまれる。プリングルズの缶は、かさばってどうしてもうまく隠せない。わたしはバックパックにつめこむ式のやり方はしなかった。あからさますぎる。キャンデー売り場に大きなリュックを背負った子ども？ あり得ない。わたしは服の下、たいていはパンツの中に品物を隠した。でもここしばらく、夏休みになってからはお店に行かなかったし、前はもっと厚着で——大きめのトレーナーとジーンズのとりあわせだった。それに、アイリーンがついて来たことはない。一度も。

「いいよ。でも何か買わないと。ただお店に入って、歩き回って出て行くのはダメ。ガムはもともと安いんだし」普通はラフィー・タフィーのキャンディか炭酸飲料を買って、狙った品物は見えないようにしてくすねた。

「じゃあ、ふたりでガムを盗もう」アイリーンがわたしを追い越して次のブロックに飛ばうとしたとたん、ふたりの素あしがからんでしまい、わたしが完ぺきにじっとしていなければ、ふたりとも落ちしてしまうところだった。

「お金ならあるよ。ふたり分ガムが買える」

「ルートビアを一本買おう」アイリーンが器用にわたしをよけて、前に出る。

「ルートビアなら十本買える」わたしはピントはずれな返事をした。

「昨日は一本をふたりで飲んだじゃない」それで納得した。ふたりのまわりですべてがふたたび、ふたりの距離の近さに反応し、シュワツと泡だつ。線香花火がはじけるみたいに。なんて返事をしたらいいかわからなかった。アイリーンはつま先をしげしげ見て、なんにも大事なことなんか聞いていないふりを装う。

「急いでやろう。おばあちゃんはわたしたちが家を出たのさえ知らないんだから」

...

駐車場の焼けつくようなコンクリートのあとでは、〈キップス〉の店内は肌寒いほどだった。たっぷりした茶色の前髪と長い爪のアンジーが、カウンターのうしろでタバコの箱を仕分けている。

「あんたたち、アイスクリームが欲しいの？」ポールモール（タバコの銘柄）の山を棚にすべらせ、アンジーがきいた。

「違う」ふたりで同時に答える。

「ふたごなの？」アンジーが伝票に何かの印をつけた。

アイリーンとわたしはどちらもTシャツ姿で、品物を隠すには向かない服装だった。アイリーンがアイダホ・スパッドのキャンディバーのラベルをじっくり読むふりをするあいだ、わたしはバブリシャス二本をつかんで、ショートパンツのゴムひもの内側にたくしこむ。ガムのパラフィン紙が肌に触れて冷たかった。キャンディバーを戻し、アイリーンがわたしを見る。

「ルートビアを買ってよ、キャム」わざとらしく、大声でさく。

「わかった」わたしはアイリーンに目を回してみせ、声を出さずに「黙ってやるの」と伝えてから、奥の壁ぎわにある冷蔵庫に向かった。

店の隅に設置された大きな丸鏡にアンジーが映っている。まだタバコを並べたり仕分けたりに忙しく、わたしたちには見向きもしない。わたしがルートビアをつかむと同時にドアのブザーが鳴り、両親の知りあいが入ってきた。スーツとネクタイ姿のところをみると仕事帰りのようだが、帰宅時間にはまだ早い。

男はアンジーにあいさつをして、ビール売り場の大型冷蔵庫にまっすぐやってきた。わたしの立っている場所のとなりだ。わたしはチップス売り場のところですれ違おうとした。「やあ、キャメロン・ポスト」男が声をかけた。「夏休みちゅう、面倒を起こしてないだろうな？」

「気をつけてます」ガムが一本、ちょっぴりすべるのを感じた。すべり過ぎればショーツから抜け落ちて、スーツ男の靴に跳ねるかもしれない。通り過ぎたいのに男はしゃべり続け、背中を向けるとビールパックの並ぶガラスドアのなかに上半身をつっこんだ。

「ご両親はクエーク・レイクにいるんだろ？」六本入りのパックをつかんだひょうしに、びんが音を立てる。スーツの背中には、椅子に座り続けてついたシワがよっていた。

「はい、昨日行きました」アイリーンが売り場にやって来て、特大の笑みを浮かべる。

「ガムとったよ」歯のすき間から声を出す、やっぱりまだ大きい。きこうと思えば男にもきこえるくらいだった。わたしはアイリーンにしかめっ面をした。

「置いてけぼりか？ 足手まといだってかい？」スーツ男は冷蔵庫から頭を出して向きを変え、トルティアチップスをつまみ、ビールのパックと一緒に持った。それからわたしにウィンクする。

「そうみたいです」男を追い払い、話を終わらせたくて、つくり笑いをした。

「君のママに、キャムはルートビアを買って本物には手を出さなかったって伝えとくよ」ビールのパックを持ちあげ、もう一度ニッと歯をむき出して笑うと、店の手前に歩いていく。わたしたちは彼のうしろを歩き、そっちこっちで数秒間立ちどまっては、はなから買う気のない品物を吟味するふりをした。

スーツ男が財布からお札をとり出す頃、カウンターに着く。「ふたりでそれしか買わないのかい？」わたしが握っている汗をかいたルートビアのびんを、男があごでしゃくる。

わたしはうなずいた。

「ふたりで一本だけ？」

「そう。半分こするんです」

「おごるよ」男はアンジーにいて、お釣りでもらったばかりのお札を一枚返した。「ルートビア一本で夏休みに乾杯か。いまがどんなに貴重な時間か、これっぽっちもわかってないんだろうな」

「まったくね」アンジーがわたしたちに渋い顔を向け、アイリーンはわたしのうしろへ隠れた。

スーツ男は「茶色の眼をした女の子」を口笛で吹きながら、ビールのパックをガチャガチャいわせて出て行った。

「どうも」男の背中に呼びかけたけれど、たぶん遅すぎて彼には届かなかっただろう。

〈キッス〉の裏手で、わたしたちはガムを次々に口に押しこんではかんだ。はじめは固くて、砂糖たっぷりの分厚いガムであごがくたびれるけど、薄く柔らかくなるまでかんで、風船をふくらませようとした。ひんやりした店から出たばかりの体に日射しが心地よく、ふたりとも、万引きの余韻でまだ興奮している。

「あいつがルートビアをおごってくれたなんて、信じられない」アイリーンはけんめいにかんで風船にしようとしたけれど、まだ早すぎて、二十五セント硬貨大にふくらませるのがやっとだった。「ぜんぶタダだよ」

「すごく貴重な時間を過ごしているからね」わたしは彼の低い声を真似しようとした。帰る道すがらずっとスーツ男の真似をしあい、笑ったり風船をふくらませたりした。わたしたちは男が正しいのを知っていた。いまという時間をたっぷり楽しんだ。

・・・

アイリーンの大きなベッドにふたり一緒に入り、カバーの下に潜りこむ。部屋はひんやりして暗く、シーツは暖かくて気持ちよかった。とっくに寝ている時間だった。一時間前にはぐっすり寝ているはずだったのに、まんじりともしない。ふたりで今日のできごとを話しあった。未来を想像した。電話の鳴る音がきこえ、かかってくるには遅い時間だったけれど、ここはクラウソンさんの家だ。牧場を営み、夏ともなればときどき遅い時間に電話がかかってくることもある。

「たぶん火事だ」アイリーンがいった。「去年の夏ひどい火事があったの覚えてる？ ハンプネルさんち、四十エーカーも焼けちゃったんだよ。それからアーネストも。黒いラブラドル犬の」

わたしはおばあちゃんと一緒に、自分の家にいるはずだった。でも今日の午後、〈キップス〉とガムのあと、アイリーンを迎えに来たおばさんにうちの私道であいさつしたとき、車の窓がおりきるのも待たずにアイリーンがわたしを泊めたいとせがんだ。おばさんはすごく鷹揚な人で、いつも笑顔を浮かべ、黒い巻き毛を小さな手ですきながら「そうしたいならいいんじゃない」と答えた。ポストおばあちゃんに話をつけてくれさえた。おばあちゃんはツナサラダのトーストを夕食にしようと考えて、もうデザートやしこみもすませていた。ピスタチオのプディングをガラス製のサンデー専用カップに盛って、冷蔵庫に寝かせてある。クールホイップ、マラスキーノチェリー、それにいただいたクルミを載せて、おばあちゃんの持っている古い『ベティ・クロッカーのクックブック』の表紙そっくりだった。

「キャンプの水泳教室には、わたしが送ります」クラウソンさんが玄関先で立ち話をしてるあいだ、わたしはすでに階段をのぼりかけ、頭の中でバッグに荷物をつめこんでいた。歯ブラシ、パジャマ、くすねたバブリシャスの残り。「迷惑なんてとんでもない。キャンプが遊びに来るのは大歓迎」おばあちゃんの返事は待たない。行けるに決まっていた。

前のとき同様、完ぺきな夏の宵だった。納屋のロフトにあがり、ふたりの場所で星を眺める。万引きしたピンク色の風船ガムを、頭より大きく膨らませた。またキスをした。アイリーンが体を傾けてきたとき、なにをしているのか正確にわかり、ことばを交わす必要さえなかった。ひと息つくたび、アイリーンがそっとうながして続けさせる。続けたかった。前は唇だけだった。今度は、手があるのを思いだした。でもそれをどうすればいいのか、どちらもわからなかった。そのあと家に入り、一緒に過ごした今日という日、ふたりの秘密に乾杯した。秘密の話をしていたら、アイリーンのパパとママの話し声がキッチンからもれてきた。電話が鳴ってから、十分ばかり経つ。おばさんが泣き、おじさんが落ちついた口調で何度も声をかけていたが、ききとれない。

「シーッ」とアイリーンがいったけれど、カバーのすれる音以外、音はたてていない。「どうしたのかきこえないよ」

すると、キッチンのおばさんが、それまできいたことのない、ひび割れた、おばさんのじゃないみたいな声を出した。ことばの意味がつかめなかった。「朝に連れていく、そのときに話す」といったようにきこえた。

廊下で重い足音がする。おじさんのブーツ。今度はふたりとも、クラウソンさんの返事をすっかりききとれた。「おばあさんが家に戻して欲しがってるんだ。ぼくたちの決めることじゃない」

「なにかすごく、悪いことだ」アイリーンが、ささやき声とは呼べない声でいった。

なんて返せばいいかわからない。それで、なにもいわなかった。

ドアがノックされるだろうと知っていた。部屋の前で足音がとまり、けれど足音と、おじさんの大きな拳がたてるノックのあいだに間があいた。無の時間。クラウソンさんはそこに立って、待ち、おそらく息をつめている、わたしと同じに。ドアの向こう側に立つおじさんのことを、しょっちょう考える。いまでもまだ。ノックの前、わたしには親がいて、ノックのあとはなくなった。クラウソンさんもわかっていた。いかつい手を持ちあげ、わたしからとりあげなければならないことを。六月の終わりの暑い一夜、夜の十一時に――夏休み、ルートビアとくすねた風船ガム、交わしたキス――十二歳の満ちたりた毎日、まだたいていのことは理解でき、わからないことは待ってさえいればそのうちわかるように思え、なんであろうとアイリーンがいつもそばにいて、一緒に待っていた。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。

[『The Miseducation of Cameron Post』 翻訳出版プロジェクトへのご参加はこちらから](#)